

社会的態度の因子的構造に関する研究

—bipolar か dualistic か—

田 中 國 夫

目 的

特別のイデオロギーを持たない、いわば普通の人たちを対象に社会的態度を測定した場合、その社会的態度は二元的に (dualistic) 構造化しているか、それとも両極的に (bipolar) 構造化しているかを明かにしようとするのが本研究の目的である。

社会的態度を右翼保守性と左翼革新性との二つにわけると考え方は一般にわれわれがもっている通俗的思考法である。昔の日本人は柔軟な思想と行動を誇っていたにもかかわらず、戦後の日本人はその柔軟さを失い、すべてを反動と進歩、民主と独裁、戦争と平和などと二分思考法的に考えるようになってしまったと批判するのが会田 (1) である。森本 (6) もあれか、これかの二値的な考え方が今日の世界の混乱の源泉であろうと指摘する。こうした見解は現代人の社会的態度があれかこれか、即ち A と -A という両極性 (bipolarity) の構造化を想定していることはいままでもない。現実には、われわれの思考は簡潔なカテゴリーにむかわせられる政治的、文化的圧力のなかで生活している。そしてそのカテゴリーの最も簡潔な形が二分分割であるから社会的態度が両極的に構造化するとみるのも自然かもしれない。個人は思考の経済原理にのっとり、あれかこれかの安楽な方法にたより、そこに用意される政治、文化が欧米の場合、保守主義 (conservatism) とリベラリズム (liberalism) の二つの choice であるから、第3の道は不可能かもしれない。わが国の場合はいまでもなく、保守主義—急進主義の choice である。

こうした現象を古くから究明し、社会的態度間の構造因子を明らかにする試みが社会心理学者によってなされてきたことは周知の通りである。最

も古くは Thurstone, L.L. (10) , 続いて Eysenck, H.J. (2) などは有名である。Thurstone は社会的態度の構造を規定している重要な因子として

1. 保守主義—急進主義, 2. 国家主義—反国家主義という二つの軸があることを明らかにした。Eysenck は 1. 急進主義—保守主義 (R 因子と名づける), 2. 軟心—硬心 (T 因子) の二つの軸を析出している。同様の研究はその後、多くの人たちによって進められ今日に至っている。(9)

こうした研究は一般に進歩主義—保守主義といった両極性 (bipolar) をもった一般因子の存在を指摘してきたが、このような社会的態度の両極的構造説に疑問を提供したのが Kerlinger, F.N.

(5) である。態度対象への負荷量が鮮やかに negative となり両極性因子を描くときは次のような測定手続きがとられたときであるという。1. 進歩主義者と保守主義者が明らかに negative な反応をするような測定対象を選んだとき, 2. 測定のための質問文が positive の表現をとらず、人工的な bipolarity をひき起しやすい negative な表現がとられたとき, 3. 調査対象者が、明らかに deviant な態度をもつ集団であるとき, 4. 因子操作で回転が行われなかったとき。こうした見解のもとに Kerlinger によって批判の対象となった研究の一つに Eysenck があげられる。Eysenck が古い研究において用いた被験者の多くが Conservatives, Liberals, Socialists, Communists, Fascists といった heterogeneous な被調査者であったし、1972年に発表された最近の研究 (3) でも Communists, Fascists が用いられた上で Bipolar 因子が析出されている。このような被調査者群を用い、しかも、いずれの研究においても未回転因子を解釈するという手続きをとっている限り、人工的な Bipolar 因子が抽出されるのは当然で、そのことが態度構造の Bipolarity 説を

裏づけるものでないことは無論のことであると指摘するのである。このほか、教育に対する態度について研究した Oliver, R.A.C., & Butcher, H.J. の研究 (7) でも、また Rinn, J.L. の研究 (8) においても Bipolarity の存在を確認しえなかったと Kerlinger は指摘する。彼自身の研究においても、尺度の構成の中に双極性が起るようにしくまない限り、つまり、明らかにある態度のもとでは両極的に判断せざるをえないような態度対象を設定したり、被調査表の判断を混乱させる negative な質問文の形式をとるなどしない限り、Bipolarity はあらわれなかったと報告している。(4)

われわれの今回の研究はそうした点に可能な限りの考慮を払いつつ、社会的態度が、dualistic か、bipolar か、いずれに構造化するものかを明らかにしようとするものである。

方 法

本研究が設定した社会的態度の対象は、政治に対する態度である。即ち、政治体制に対する態度構造をみようとするものであり、具体的には政党や政治的集団ならびに脱体制集団に対する態度を分析の対象に選んだ。政党としては自民党と旧左翼政党を設定し、政治集団としては新左翼集団、脱体制集団としてはヒッピーズを選んだ。自民党に対する態度を明らかにすることで保守政党への態度分析をねらい、革新政党への態度は社会党、共産党を含めるという大胆な概括を試みた。これは近年新しく政治的集団として抬頭してきた新左翼との対比のためにあえて一括したものであり、新左翼を体制「外」反体制集団とすると、旧左翼政党は体制内批判政党として一括することも可能であろうという観点からの処置にはかならない。反体制的な態度を明らかにするために、新左翼集団への態度を設定したが、ここでも新左翼集団内にある各種の派閥、さらにはノン・セクトの区別を一切捨象し、一括して態度測定尺度を作ったことをことわっておかねばならない。反体制集団への態度と並んで今日、無視することのできない態度は脱政治的、脱体制的な態度である。これはヒッピーズに対する態度尺度で明らかにしようと試みた。

各態度尺度のステイトメントはしかるべき文献から蒐集したり、学生の自由作文から採取した。尺度はリツカート・タイプに作成され昭和45年10月、関西学院大学、社会心理学受講生153名（男子70名、女子83名）に調査された。このうち60サンプルを抽出、項目分析を行ない、不適当な項目を除去し、最終尺度とした。それらの尺度をあげると次の通りである。

自民党に対する態度尺度

1. 大企業一辺倒の自民党の政策を支持できません。
2. 自民党の自由競争政策は国の経済の発展をうながすよい政策だと思います。
3. 財界と結びついた自民党に投票すべきでないと思います。
4. アメリカ追従の自民党の政策に賛成できません。
5. 経済力にものをいわせて対外進出しようとする自民党の政策は好ましくありません。
6. 労働者不在の自民党の政治に賛成できません。
7. 国会では自民党の議席が過半数を占めていることが望ましいと思います。
8. 自民党の結んだ安保は国民の意志を無視した悪い条約だと思います。
9. 武器をもたない労働者の運動を機動隊を使って押えようとする現政府はまちがっていると思います。
10. 自民政権が続く限り、国民は幸福にならないと思います。
11. 自民党の自衛隊増強政策は日本にとっても国際問題としても好ましくないと思う。
12. 一部の資本家だけが住みよい自民政権下の資本主義は改めるべきだ。
13. 自民党の経済政策は結局、国民生活を向上させる良い政策である。
14. 国民福祉を無視した経済政策をとる自民党の候補に投票すべきではないと思います。
15. 現在の公害は自民党の大企業優先の悪い政策の結果だと考えます。

旧左翼政党に対する態度尺度

1. 社会をよりよくするためには革新系候補に投票すべきだと思います。
2. 革新系政党を労働者の権利を守る政党として支持します。
3. 共産主義イデオロギーをもつ革新系政党が政権をとれば、日本社会にとって良い結果をもたらさないとします。
4. 革新系政党の主張する平等は人間をなまけものにし、社会や文化の発展をさまたげるので賛成しかねます。
5. 社会主義が導入されれば、国民すべてが平等になり、幸福になるとします。
6. 大企業や資本家の財力に人々が対抗するためにも、革新系政党が発展してほしいとします。
7. 労働組合のストライキ戦術は大衆に迷惑をかけるので、禁止したほうがよいとします。
8. アメリカの東南アジアへの侵略に反対する革新系政党の主張に賛成します。
9. 革新の意欲を失った旧左翼は時代おくれで存在価値はない。
10. アメリカ帝国主義と戦うベトナム人民を支持する革新系政党の考えは正しいとします。
11. 革新系政党が強くなると社会の自由な発展が阻害されるので好ましくないと思します。

新左翼集団に対する態度尺度

1. 新左翼の暴力活動は大衆に大きな迷惑をかけるのだから取り止めたほうがよいと思します。
2. 新左翼の斗争にはできる限り参加したと思します。
3. 体制に流されず、自らの道を進もうとする新左翼の態度にひかれます。
4. 勉強もしないで、破壊活動ばかりする新左翼が学園に多くいることは悲しいことだと思します。
5. 義務、責任をかえりみない新左翼は社会人としては失格だと思します。
6. 機動隊の暴力に対する新左翼のゲバは正当な防衛手段だと思す。
7. 旧左翼が体制化したいま、社会の矛盾と戦

うのは新左翼以外にはないと思します。

8. 新左翼の若々しさ、純粋さにひかれます。
9. 人命などはなんとも思わない新左翼の行動は社会から締めだすべきだと思します。
10. 新左翼の日常性否定は単に社会を混乱させるだけだ。
11. 多くの大衆のできない行動をすることのできる新左翼こそ真に勇気のある人々だと思します。
12. 体制は人間を単なる機械の部品としてしまうのであるから新左翼の日常性否定は正しい考えだと思します。
13. 新左翼の運動は旧来の民衆の運動をさまたげ、マイナスだと思します。
14. 現実無視の新左翼の運動は意味のないものだと思します。
15. 既成の価値や制度にあてはめられず、自らそれを創造しようとする新左翼の態度は立派だと思します。

ヒッピーズに対する態度尺度

1. みにくい物質欲を持たないヒッピーの思想に共鳴します。
2. 兵役を拒否するヒッピーの平和主義に賛成します。
3. 物質文明に毒されず、自己の心情にしたがって生きるヒッピーの生活感覚に共鳴します。
4. マリファナ、異様な服装などヒッピーの風俗に嫌悪を感じます。
5. ヒッピーの仲間や集会に参加したいと思します。
6. ヒッピーは社会の脱落者であり、彼らの主義、主張は単なる負け惜しみにすぎないと思します。
7. ヒッピーは社会矛盾に対する抵抗者であり体制にへつらう常識者よりよりも人間らしい人間であると思します。
8. 普通人のできない行動をするヒッピーは真に勇気のある人間だと思します。
9. 勉強も仕事もせず、ぶらぶらしているヒッピーは社会のくずだと思します。
10. ヒッピーが私の身内にいると恥だ。
11. あくせく働くよりもヒッピーのようにのん

びりくらしたい。

12. わが国にヒッピーが増えたり来日したりすることは残念だと思います。

Kerlinger の指摘、つまり、質問文の表現を、自然に、ないしは positive にするという点についてはできる限り努力したが、やむなく negative な表現をとったもののあることをことわっておかねばならない。もちろん、集計はすべて各対象への好意的態度の方向から行ない positive, negative の表現から人工的な bipolarity が生じるといふことのない配慮を行なったことはいうまでもない。

まず、はじめに各尺度に対する 5 段階の反応を集計し、各被調査者の総合得点（リッカートの簡便法による）を用いて 4 つの態度対象間の相関係数を算出した。

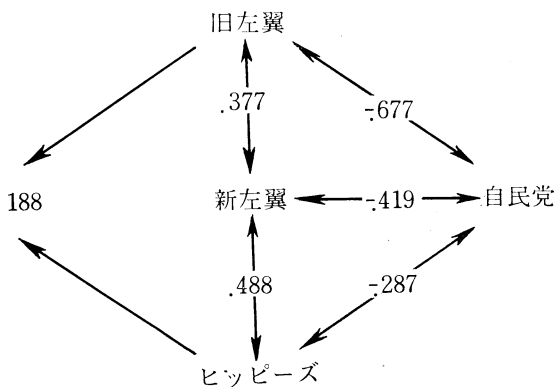
次に、4 つの態度尺度の全項目の類似係数 $n_{ij}/\sqrt{n_i n_j}$ を計出した。

最後に、4 つの態度尺度項目間（同じ尺度内で内容の重複していると思われる項目は一部割愛された）の相関係数を求め、その相関行列を因子分析し、Varimax 回転を行ない、第 5 因子までの因子行列を抽出した。

結果と解釈

われわれの研究の目的は既にのべた通り、社会的態度の構造化を、dualistic か bipolar かといった側面からみるのであるから、態度対象項目間の因子行列から分析を加えればよいのであるが、それにとりかかる前に 2 つの観点から社会的態度

第 1 図 自民党、旧左翼政党、新左翼、ヒッピーズに対する態度の相互相関係数



の構造化の一面を明らかにしようとした。その 1 つが 4 つの態度対象への態度の相関係数である。第 1 図がその結果である。これは普通の（特別にイデオロギー集団を対象にしたものでない）青年集団においてもたれている保守、革新、超過激、脱体制への態度がどのように構造化しているかをまず、大まかにとらえようとしたものである。

われわれをとりまく今日の政治情勢をみるとき各人のもっている政治的な態度は保守、革新の 2 つに加え、超過激さらには脱体制の 4 つの大きな圧力から選択を強いられていると考えてよいが、第 1 図でみる限り、現実の青年学生 4 対象への態度は保守党と非保守集団とに對極させて把握していることを教えている。即ち、自民党への態度と他の 3 つの態度対象への態度はそれぞれ逆相関をしめしているのである。これが因子負荷量にまで bipolar をもたらすかどうか、つまり態度の両極の構造化を結論させるかどうかは後の因子分析的アプローチまで待たなければならない。ここでは相関係数でみる限り、青年の政治的態度は保守性—非保守性の二群にわかれていることを大まかに理解するよりほかはないが、第 1 図の数値がしめす意味をもう少し詳しく分析することも意味のないことではない。

自民党と旧左翼政党への態度は、.677 という強い負の関係をしめしているのに対し、ヒッピーズに対してはかなり低い、-.287 という低逆相関をしめしている点に注目したい。これは脱体制集団への態度は自民党といった純然たる政治的態度対象に対する態度反応とはちがった判断が入るものとみられるのである。そのことを裏づけるのが旧左翼政党とヒッピーズとの低い相関、.188 である。自民党や旧左翼政党という既成政党に対する態度とヒッピーズに対する態度との間には positive にしろ negative にしろ、明確な対応関係がないということは一つの態度次元で律しきれない別のものであることを予想させる。既成政党とシャープな対応関係をもたないヒッピーズが新左翼集団という過激派反体制集団と、.488 という高い正の相関をもっていることがその態度成分の何であるかを示唆している。青年の集団はこの両集団を政治体制とのかかわりから切りはなし、人間の生き方という観点から態度の情緒的成分レベルで反応して

いことを想像させるのである。

この辺の内容を別の角度から明らかにしようとしたのが、各項目間類似係数からの分析である。ここでいう類似係数とはある項目と他の項目が同時に反応する傾向をみるための係数である。4つの態度対象の各項目の合計53項目のマトリックスであらわされるが、紙面の関係でここにはあげず、1つの例をあげるだけにとどめておきたい。

さきに問題にした新左翼集団とヒッピーズとの反応内容を吟味すると、新左翼に賛成するものはヒッピーズには賛成、前者に反対のものは後者にも反対の傾向の強いことをしめしているが、双方に賛成をしめすものは両者の尺度項目のなかの感情的成分の強い項目に強い賛成反応をしめすもの

であり、双方に反対をあらわすものは、新左翼、ヒッピーズの態度項目中、認知的成分、行動的成分の強い項目に賛成をあらわすものであった。新左翼集団やヒッピーズは既成社会の価値体系に対する不信の表明であり、この両者に強い賛成をしめす傾向のあるものは態度の情緒的成分にウエイトをおいて反応したものであろうというわれわれの予測を裏がきしたものとといえるのである。

次に本研究の主目的である社会的態度の因子的布置の問題に移ろう。4態度対象の各項目間の相関行列を因子分析し、Varimax 回転後の因子行列を男女別にしめたのが第1表(男)、第2表(女)である。

有意な負荷量は第1因子第2因子に集中し、

第1表 自民党, 旧左翼政党, 新左翼, ヒッピーズに対する態度因子一男一

	I	II	III	IV		
自 民 党	1	.127	.420	.023	.055	
	2	.189	.332	.001	.011	
	3	.168	.443	.013	.013	
	4	.175	.429	.014	.035	
	5	.191	.385	.004	.013	
	6	.190	.422	.039	.084	
	9	.135	.363	.028	.093	
	11	.149	.120	.048	.025	
	13	.186	.415	.002	.016	
	14	.187	.273	.047	.017	
	旧 左 翼 政 党	2	.361	.116	.174	.042
		3	.396	.155	.108	.023
		4	.473	.127	.055	.002
		5	.235	.059	.140	.025
6		.374	.030	.172	.029	
7		.476	.118	.060	.062	
8		.291	.110	.131	.026	
9		.243	.011	.162	.146	
10		.405	.118	.126	.019	
11		.463	.151	.058	.026	
新 左 翼		1	.389	.104	.045	.005
	3	.441	.092	.015	.105	
	4	.438	.199	.067	.014	
	5	.416	.080	.062	.001	
	7	.322	.005	.022	.008	
	8	.423	.060	.011	.134	
	10	.464	.043	.039	.002	
	11	.403	.001	.006	.081	
	13	.567	.088	.061	.005	
	14	.551	.027	.059	.004	
	ヒ ッ ピ ー ズ	1	.478	.053	.058	.010
		2	.416	.098	.006	.017
		3	.475	.085	.074	.005
		4	.342	.011	.207	.014
6		.466	.005	.227	.005	
7		.484	.039	.021	.002	
8		.483	.011	.044	.001	
9		.476	.022	.183	.005	
11		.372	.006	.012	.015	

第2表 自民党, 旧左翼政党, 新左翼, ヒッピーズに対する態度因子一女一

	I	II	III	IV		
自 民 党	1	.109	.410	.009	.037	
	2	.120	.255	.002	.061	
	3	.140	.292	.008	.010	
	4	.184	.251	.019	.016	
	5	.132	.393	.067	.025	
	6	.134	.252	.021	.002	
	9	.094	.275	.019	.022	
	11	.037	.455	.021	.044	
	13	.103	.331	.006	.031	
	14	.078	.418	.007	.063	
	旧 左 翼 政 党	2	.426	.068	.013	.015
		3	.466	.070	.016	.006
		4	.522	.074	.024	.022
		5	.365	.053	.001	.011
6		.586	.053	.000	.032	
7		.626	.039	.012	.010	
8		.557	.044	.003	.010	
9		.293	.014	.014	.103	
10		.551	.020	.005	.044	
11		.557	.092	.032	.008	
新 左 翼		1	.373	.109	.019	.043
	3	.494	.097	.110	.049	
	4	.503	.067	.079	.049	
	5	.455	.160	.022	.050	
	7	.368	.044	.011	.016	
	8	.415	.023	.030	.025	
	10	.492	.121	.055	.043	
	11	.502	.103	.032	.037	
	13	.496	.005	.057	.089	
	14	.399	.039	.042	.057	
	ヒ ッ ピ ー ズ	1	.473	.063	.099	.027
		2	.432	.055	.016	.060
		3	.414	.034	.085	.045
		4	.208	.027	.140	.004
6		.428	.059	.105	.021	
7		.501	.120	.069	.000	
8		.312	.060	.106	.019	
9		.489	.054	.079	.002	
11		.282	.030	.102	.019	

第3因子以下ではほとんど有意な解釈を見出すことはできなかった。(計算は第5因子まで行なった) 第1表, 第2表のそれぞれがしめすように因子回転の結果は明らかに bipolar でないことがわかるが, さらに鮮明なイメージを伴わせるために4態度対象の中の若干個の項目をひろって2次元の直交座標軸に表示した。第2図(男), 第3図(女)がそれである。

男女とも第1因子に高い因子負荷量をもたらしたのは旧左翼政党, 新左翼政治集団, ヒッピーズ

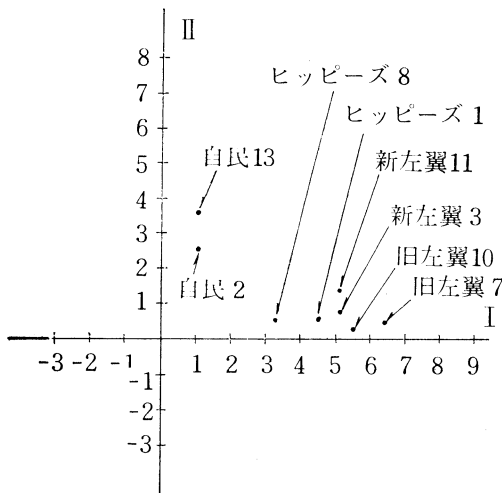
のほとんどの項目である。第2因子は自民党の11番目の項目(自衛隊増強計画への否定態度)に対する男子の低い負荷量を例外として, 明らかに自民党尺度項目への高い負荷量が一つのクラスターをなしている。

これらの結果は特別の強力なイデオロギー集団を対象とせず, 一般の青年学生を被調査者とする限り, 彼らの社会的態度は2つの因子で構造化されていることをしめしている。しかも, それは第2図, 第3図がしめすように bipolar な象限に布置しないことを鮮やかにしめすのである。

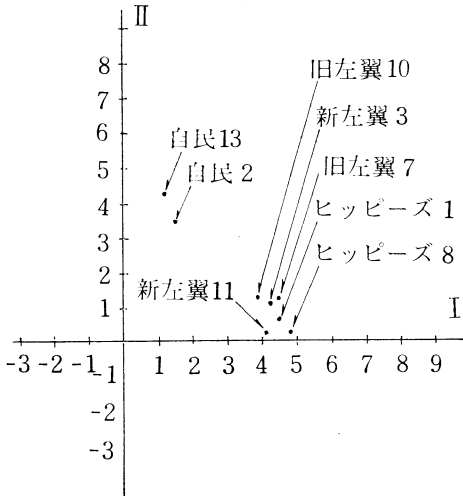
つまり, われわれのまわりにおいて, われわれの政治的態度に choice をせまる大きな刺戟体として保守党, 旧左翼政党, 新左翼集団とヒッピーズに象徴される脱政治志向があるが, それらに対する青年学生の態度は二次元の直交座標上の一つの象限内に構造化している。それ故, それら2つの態度因子は bipolar に存在しているというより, dualistic に布置しているという方が正しいと指摘できるのである。bipolar というのは文字通り, 単一連続上の両端に存在することであるが, CA or-A dua-istic というのは二つの要素のある (twofold), 二重の (double), 二面性をもった (two-sided) という意味であり, 本研究のえたI軸とII軸上の各項目変数のクラスターは明らかに dualisty の存在を想定させるものである。

われわれの政治に対する態度は表面上, 保守か革新かといった bipolar な形でとらえられているとみられ易いが, 現実の普通の人間にとっては, それらをあれかこれかの両極においてとらえているのではないとみるほうが事実在即していることを示唆している。例えば, 教育における進歩主義者と保守主義者の態度を考えてみよう。この両者は進歩と保守の両極にあって互いに相容れないということは一般的ではない。それより, 保守主義的な人が「子どもの欲求の尊重」という進歩的な考えに賛成することがありうると考えるほうが一般的である。つまり, 進歩主義者と保守主義は互いに dualistic なしかたで語りあっていることのほうが多いというのが自然なのである。政治に対する態度においても一般的に特別のイデオロギー集団成員でない限り, dualistic なしかたでその態

第2図 自民党, 旧左翼政党, 新左翼, ヒッピーズに対する態度の因子布置—男—



第3図 自民党, 旧左翼政党, 新左翼, ヒッピーズに対する態度の因子布置—女—



度を表明していることが多いことをわれわれの結果はしめしているのである。こうした観点にたつて、われわれの得た第1因子（I軸）と第2因子（II軸）を命名すると、第1因子を心情的進歩主義とし、第2因子を現実的大勢主義とするのが妥当かと考えられる。前者は旧左翼の進歩主義と新左翼、ヒッピーズの心情主義のクラスターをまとめて命名したものであり、後者は、自民党という保守党への態度を現実主義という角度で把握したものである。因子の命名に保守主義—進歩主義という従来用いられてきた対決の用語を採らなかつたのは、われわれのえた態度項目の布置内容がそうさせたものであるが、それは当然、因子の命名にも反映さるべきものと考え、できる限り dualistic に社会的態度をとらえやすいものとして、前記の命名を試みたのである。

社会的態度の構造に関する dualistic 説はさらに態度対象、測定尺度の用語と構成、因子分析の技術の検討などを通して深められていく必要があるだろう。

要 約

特別のイデオロギーをもつ集団成員にではなく普通の人に対し、政治的な対象に対する社会的態度を測定すると、それは二元的 (dualistic) に構造化しているか、それとも両極的に (bipolar) に構造化しているかを明らかにするために行われたのが本研究の目的である。

態度尺度の構成と集計に際してはできる限り人工的な bipolarity が生じないよう配慮が加えられた。政治的な態度を測定するために自民党、旧左翼政党、新左翼政治集団、ヒッピーズに対する態度尺度がリッカート・タイプで作成された。これらの態度対象が選ばれたのは超過激派—過激派—保守派、それに脱政治志向という4つが今日の政治状況での重要な choice points となるという仮定からである。

被調査者は関西学院大学社会心理学教授講生153名（男70名、女83名）で昭和45年10月に調査が行われた。

分析は3つの側面からなされた。第1は4つの態度対象ごとに個人のリッカート得点が計出され

4つの態度対象間の相互相関係数が計算された。結果は自民党への態度と他の3つの態度対象とが、negative の相関をしめし、ともかくも、青年学生への政治に対する態度では、保守党と非保守集団とに対極させて把握されていることが判明した。非保守集団への態度間では、新左翼とヒッピーズが、.488という高い相関をしめし、反体制集団と脱体制集団に対する態度のなかになんらかの共通性がみられることが示唆された。

第2には、4つの態度対象の各項目ごとにそれらの反応が同時に選択される確率を類似係数算出の方式で計出した。これによって、さきに指摘した反体制集団である新左翼集団と、脱体制集団であるヒッピーズへの態度をともに支持する共通性の根源などが判明した。つまり、態度の情緒的成分に強い傾向をもつ人間が、新左翼やヒッピーズに強い賛成をしめすことなどが明らかになった。

第3に行なったのが、全項目への反応の因子分析である。男女別々に計算されたが、Varimax 回転の結果は、ほとんど同様な因子布置をしめした。4つの態度対象に対し得られた因子はシャープな直交因子で、bipolar なサインはどの一つの項目にも見出されなかつた。4つの態度対象間の相関係数では保守党への態度と非保守的集団への態度が比較的高い逆相関となったが、因子分析の結果はそれは bipolar な分極でなく、dualistic な布置であることが判明した。そうした観点から因子の命名も対極のニュアンスを避け、心情的進歩主義と現実的大勢主義とした。一般の人間の社会的態度はAかしからずんば-Aといった対立ではなく、心情的で理想主義的な進歩主義志向と、現実的で大勢順応的志向の両面を重複させながら社会的態度を保持しているとみるのが妥当ではないかというのが本研究の結論である。

参考文献

1. 会田雄次, 日本人の忘れもの, PHP 研究所, 昭和47年, 147—148.
2. Eysenck, H. J., Primary social Attitudes ; The Organization and Measurement of Social Attitudes, Int. J. Opin. Attit. Res., 1947, 1, 49—84.
3. Eysenck, H. J., & Coulter, T. T., The Personality and Attitudes of Working-class British

Communists and Fascists, *J. Soc. Psychol.*, 1972, 87, 59—73.

4. Kerlinger, F. N., & Kaya, E., The construction and factor analytic validation of scales to measure attitudes toward education, *Educational and Psychological Measurement*, 1959, 19, 13—29.

5. Kerlinger, F. N., Social attitudes and their Critical referents; A factorial theory, *Psychol. Rev.*, 1967, 74, 110—122.

6. 森本哲郎, 生きがいへの旅, ダイアモンド社, 昭

和45年, 189.

7. Oliver, R. A., & Butcher, H. J., Teacher's attitudes to education; The structure of educational attitudes, *British J. Soc. and Clinical Psychol.*, 1962, 1, 56—69.

8. Rinn, J. L., Structure of phenomenal domains, *Psychol. Rev.*, 1965, 72, 445—466.

9. 田中国夫, 日本人の社会的態度, 誠信書房, 昭和39年.

10. Thurstone, L. L., Vectors of the Mind, *Psychol. Rev.*, 1934, 41, 1—32.